

キュウリ（夏秋雨よけ）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作 型												
主な作業	播種 定植 支柱立て 整枝 追肥 収穫											

技術体系

1 作型の特徴

生産安定と品質向上を図るため雨よけ施設を利用する。ただし、キュウリの雨よけ栽培は盛夏時には高温より草勢低下がおきやすいので、換気に特に注意しなければならない。

栽培管理にあたっては健苗づくりにつとめ、本葉3.5枚～4.0枚程度の若苗で定植し、親づるの摘心（本葉25枚程度）までに根を十分張らせ、栄養生長と生殖生長のバランスを図りながら長期栽培に耐え得る草勢づくりが栽培上最も重要である。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

(1) 温度

発芽適温 25～30℃

昼温 25～28℃

夜温 13～18℃

地温 18～20℃

(2) 光

光飽和点 5～6万ルクス

受光量が大きいほど生育は良好となる

(3) 土壌条件

根は浅く、広く分布し、酸素要求量が多い。

腐食に富み、膨軟な深い土壌に適応する

好適土壌沖積地帯の埴壤土

4 施設装備

(1) 単棟型ハウス

(2) 灌水施設

5 経営目標

(1) 収 量 5 t / 10 a

(2) 投下労働時間 1,500時間

(3) 所得率 45%

(4) 経営規模 10 a

(家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品質と特性

〔穂木〕

「アルファー」

果実肥大が早い。茎が太く孫枝の発生が良好で、草勢が良い。

栄養成長と生殖成長のバランスが良く初期収量が上がり後期まで獲れる。

果皮色は濃緑で光沢が良く、果長は21～22cm、100～120gの円筒形果で果揃い良好。

高温期で退色なく尻太り、先細りの発生が少ない。

「ステータス夏」

べと病、うどん粉病に強い。小葉で厚みがあり、草勢が強い。果色、光沢に優れ、秀品率が高い。

「オーシャン」

果皮色は濃緑で光沢が良く、果長は21cm、100gの円筒形果で果揃い良好。

クズ果が少なくシーズンを通して果形・果長が安定。小葉で茎葉の無駄伸びがなく省力型。

【台木】

「ニュースーパー雲竜」、「エキサイト一輝」等を用いる。

2 育苗

高温期の育苗は、水分過不足に左右されるので良質の床土を準備する。

灌水ムラが生じないように注意して灌水する。

(1) 播種期

6月上旬～7月上旬

(2) 播種量

10a 当り穂木1, 500粒、台木1, 500粒

(3) 播種

播種箱を利用し、床土を厚さ4cm程度入れ、穂木、台木共条間6cm、株間3cm程度に播種し、十分灌水した後表面が乾燥しないよう新聞紙等で覆い、発芽し始めたなら早めに除去する。

台木は穂木より2～3日後に播く。

発芽後は徒長しないように灌水を控えて土壌水分下げ、換気を十分に行う。

(4) 接ぎ木

台木の播種7～8日後で子葉が逆八字頃に呼び接ぎを行い、12cm鉢に鉢上げする。接ぎ木後は寒冷紗で被覆してしおれを防ぐ。接ぎ木後10日目頃に断根する。

(5) 鉢ずらし

育苗床は10a 当たり80㎡確保する。

本葉2枚頃から生育が早くなるので早めに行う。

(6) 温度管理

発芽までは昼温25～28℃、夜温18～20℃、地温は20℃を保ち、発芽し始めたなら換気を多めにし夜温を2～3℃下げて徒長を防ぐ。

接ぎ木、鉢上げ時の移植床の温度管理は播種床よりやや高めに保つ。活着後は昼温25℃、夜温16～18℃位で管理する。

3 本圃の準備

定植2週間前までには準備、基肥を行う。

灌水の便、通風、排水の良い圃場を選定する。

基肥施肥前に良質の有機物の投入、深耕を行い土壌改良と保水力を高める。

(1) 施肥

基肥は定植の2週間前までに全面に施用し、プラウまたは深耕ロータリー等で深く施肥する。深耕ができない場合は、基肥の半量は深層溝施肥したがよい。またチッソ質肥料は緩効性肥料を用い、3年以上の連作地ではカリの施用量を減らす。

施肥量 (kg / 10a)

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
基 肥	15	60	20	
追 肥	30	—	20	
合 計	45	60	40	

(2) ハウス建て

間口5mの単棟型ハウスを用いる。ビニルは厚さ0.075mm、幅6.8～7.0mを用い、被覆時期は圃場水分の状態が最もよい時に行う。

(3) 排水対策

ハウスとハウスの間は1m以上の幅を取り、ハウスの間の土をハウス内に入れ、広く深い溝を掘り、古ビニルを利用し溝にマルチをし、梅雨時でもハウス内の土壌が乾燥するように心がける。

(4) 畦づくり

根郡の発達と排水を良くするため高畦とする。

土壌水分を調節し適当な水分のときに行う。

(5) 灌水施設

灌水チューブを1条に1本は設置しておく。

(6) マルチの実施

土壌の乾燥防止、地温上昇抑制、併せて病害、雑草予防のため白黒マルチ等を行う。

(7) 支柱立て、ネット張り

図のようにパイプ支柱を2～2.5m間隔に立て、直管パイプ、針金等で補強しネットを張る。

4 定植

(1) 定植時期

育苗日数30日、本葉3～3.5葉期に定植する。老化苗は活着、生育不良の原因となる。

(2) 栽植様式

畦幅1.8m、株間50cm1条植えとし、10a当たり800本定植する。

(3) 定植方法

作業は曇天日か、夕方に手早く行う。

深植えにならないように注意する。

定植前に鉢に十分灌水をしており、定植後も根鉢に十分灌水し活着を促す。

定植位置はパイプ支柱の内側とし、定植後直ちにネット又は仮支柱に誘引する。

高温対策で遮光率の低い被覆資材を利用し地温を下げる。

5 整枝

(1) 側枝

ア 子づる

摘心は展開摘心を行う。

地際より30cm以下の子づる(5～6節)は早めに摘除する。

下段(7～10節)の子枝は各節1節で摘み孫づるの発生を促す。また8～10節以下の子づるは2～3果収穫後摘除する。

中段(11～16節)の小づるは各節2節で摘む。

上段(17～20節)の小づるは各節1節で摘む。

イ 孫づる

下段(7～10節)の孫づるは各節2節で摘み果実肥大を促す。

中段(11～16節)の孫づるは放任とする。

上段(17～20節)の孫づるも放任とするが、樹勢、繁茂の状態に合わせて摘芯する。

(2) 主枝

主枝は20節で摘心する。

6 摘葉

1番果収穫期に主枝の下位4～5葉を摘除する。その後樹勢を見ながら5～7日おきに親蔓の葉2～

4葉を摘除、同時に必要に応じて側枝の病葉、老化葉黄化葉も摘除する。

葉も茎も大きく子づるも太く長いときは、8～9節くらいの葉を1～2枚摘葉する。

一度に多量の摘葉はさける。9月以降は枯葉、病葉のみの摘葉にする。

7 摘果

主枝の12節以下の果実は1～2果に制限し、中位の子蔓の伸長を促す。曲がり果、尻太果、尻細果は収穫作業時に早めに摘果し、長期にわたる樹勢の維持に努める。

8 誘引

親蔓が垂下がないように早めに誘引する。

9 灌水

根を深く張らせる。

定植時のみ活着促進のため株元に灌水を行う。その後5～13節の間は灌水を控え、できるだけゆっくり生育をさせる。

心焼け、草勢が弱いようであれば株元に少量灌水を行い生育を助ける。

主枝雌花開花期頃に少量灌水し、果実肥大を促す。

1番果収穫前よりpF 2.0を灌水点とし、少量多回数の灌水を行う。

収穫最盛期以降は常に子～孫づるの生育が止まらないように、少量多回数の灌水と追肥を行う。

低温期の灌水は多量に施すと地温を下げるので少量ずつ行う。

10 追肥

追肥は1番果の収穫直前から始める。

追肥のやり方は10a当たり1回の施肥量、窒素、カリそれぞれ2～2.5kgを収穫前期及び後期は7～10日おきに、収穫最盛期には5～7日おきに灌水チューブを利用した液肥として施用する。

11 気象災害(長雨、台風)対策

直管パイプ等でハウスを補強する。また、天井に

は防風ネット、サイドには寒冷紗を張る等の対策を講ずると共に圃場の周囲にも防風ネットを張る。

1.2 収穫・出荷

毎日、早朝の品温の低い時間に収穫する。若穫り（18～20cm）することが成り疲れ防止に効果が高く、しかも収量が増加する。

夏場（最盛期）には、朝夕1日2回穫りする。

出荷については県の出荷規格により出荷する。